



年 組 名前

道新でワークシート



プラウをもたらしケプロンに続き、外国人が伊達のさらなる発展のきっかけをつくった。北大の前身、札幌農学校初代教頭のクラーク博士が1877年（明治10年）、帰国途中に伊達に立ち寄り甜菜（ビート）の栽培を勧めたのだ。試験栽培されたビートには十分な糖分があり、80年には国内初の製糖工場となる紋別官営製糖所が建設された。自給作物中心から商品作物へ。近代化で砂糖の需要は拡大。ビートは小豆などとともに伊達の農業を支える作物になった。

ビートの栽培

農業支える商品作物に

地元のスーパーに並ぶ北海道糖業の「ほのぼの印」製品。上白糖は製造・袋詰めともに道南製糖所ウロコ末永店



官営製糖所はその後、紋別製糖会社となるが経営難に陥り、96年に解散。1959年に現在の北海道糖業道南製糖所ができるまで製糖業はいったん途絶える。

ただ、今も「ビートは伊達の農業の柱」（伊達市農協の佐藤哲組合長）。全農地の約7%に当たる342haに作付けされ、全量が地元のだな製糖所に搬入される。従業員55人の同製糖所には伊達など32市町村から20万ト以上が運び込まれ、「ほのぼの印」の上白糖などが生産されている。（和田年正）

2019年9月11日（水）朝刊 室蘭・胆振版 19ページ

- ① 1877年に伊達で甜菜（ビート）の生産を勧めたのは誰ですか？
- ② 甜菜（ビート）は何の原料となる作物ですか？
- ③ 北海道で砂糖が生産されることで、さらに道内であるものの生産が盛んになりました。そのあるものとは何でしょう。特に十勝地方には、その会社が多くあります。「〇〇の町 十勝」などと呼ばれます。